

機関番号：13801

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20730494

研究課題名（和文） 北アメリカ成人教育者の能力開発に関する基礎的研究

研究課題名（英文） A Study on Professional Development of Adult Educators in North America

研究代表者

渋江 かさね (SHIBUE KASANE)

静岡大学・教育学研究科(研究院)・准教授

研究者番号：10377707

研究成果の概要（和文）：

社会教育・生涯学習の支援者の力量形成として、実践とその省察を核とするものが展開されている。これは、欧米の省察的実践論の影響を受けている。本研究では、欧米の省察的実践論のひとつとして紹介・受容された、パトリシア・克蘭トンによる成人教育者の能力開発を、実践的研究として位置づけ直した。その結果、社会教育・生涯学習の支援者の力量形成のあり方に加え、これを担いうる大学教員（研究者）のあり方を提起できた。

研究成果の概要（英文）：

Professional development of educators of social education and lifelong learning has been developed based on practice and reflection. This is influenced by theories of reflective practice from Europe and America. This study reviews the theory of professional development of adult educators proposed by P. Cranton. Based on this, it makes proposals for the professional development of educators of social education and lifelong learning.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：教育学

科研費の分科・細目：教育学

キーワード：成人教育者、能力開発、現場での実践と省察、成人教育 D.Ed プログラム、成人学習、大学教員（研究者）

1. 研究開始当初の背景

1990年代以降、社会教育・生涯学習の支援者の力量形成（能力開発）のあり方として、実践とその省察を核とするものが展開してきている。こうした力量形成のあり方は、社会教育実践分析研究を源流とする。この研究

の過程の中で、欧米の学習論に学ぶ試みがなされた。さらに、社会教育及びその隣接領域の職員の力量形成が、実践的に模索された。

その結果、ドナルド・ショーンの省察的実践、エティエンヌ・ウエンガーのコミュニティ・オブ・プラクティスなどに理論的ベースを求めた、実践とその省察を核とする力量形

成のあり方が構築されてきている。さらに、これを大学や大学院で展開していく動きも見られるようになってきている。

本研究では、北アメリカの成人教育研究者パトリシア・クラントンによる、成人教育者の能力開発について検討をおこなった。これは、社会教育実践分析研究の関連でも紹介され、実践とその省察を核とした社会教育・生涯学習の支援者の力量形成にも影響を与えた。検討の理由は、以下三点に集約できる。

- (1) クラントンによる、成人教育者の能力開発のあり方の意義と課題については、現在も研究・実践が進行中という意味で、検討の余地を残す。だが、今までの検討は、翻訳書『おとなの学びを拓く』(1999)と『おとなの学びを創る』(2004)に留まり、十分でない。そうした状態の中で、クラントンの考え方がモデルとして使われたり、一面的に批判されたりしている実態がある。
- (2) クラントンの実践に即して、成人教育者の能力開発のあり方を検討した研究が、ほとんどない。クラントンに限らず、欧米の学習論・省察的实践論について、いかなる実践から立ち上がってきたかを吟味しないままでは、日本の社会教育・生涯学習支援者との異同があいまいなままでは、理論先行型の力量形成や、欧米の学習論・省察的实践論の道具的な活用が懸念される。
- (3) 実践とその省察を核とする力量形成を、大学や大学院で展開していく際は、大学教員のあり方が問われてくる。さらに、大学教員自身も省察的实践者として、みずからの実践とその省察に取り組んでいくことが求められる。クラントンによる成人教育者の能力開発は、この点に一石を投じているため、学び直す必要がある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、以下三点である。

- (1) 実践とその省察は、北アメリカ成人教育者の能力開発のあり方として、一定の位置を占める。クラントンの能力開発の考え方は、そうしたあり方に立っているとして、日本に紹介・受容されたもののひとつである。こうしたクラントンの能力開発に関して、実践とその省察についての構造・プロセス、及び方策を明らかにすると共に、意義と課題を示す必要がある。
- (2) クラントンによる能力開発の考え方について、実践に即して理解した上で、意義と課題を検討する必要がある。とりわけ、現在所属するペンシルベニア州立大学ハリス

バーグ校の成人教育 Doctor of Education (以下、D.Ed) プログラムは、成人教育に従事している・していた大学院生が、実践者として力をつけることをめざしており、注目に値する実践である。

- (3) 実践とその省察を核とした社会教育・生涯学習支援者の力量形成について、展開を跡づける。それを通して、どのような社会教育・生涯学習支援者が、実践とその省察を核とした力量形成に、どのように取り組んできたかを明らかにする必要がある。

3. 研究の方法

本研究の方法は、以下三点にまとめられる。

- (1) クラントンによる成人教育者の能力開発に関連する、つぎの文献を調査する。
 - ① クラントンによる著作については、二冊の翻訳書と、そのほかの論文と文献
 - ② クラントンがみずからの実践を通して能力開発についての考え方を創っていく際に、影響を与えたと思われる成人教育研究者の論文と文献
 - ③ 成人教育 D.Ed プログラムで、クラントンの指導を受けた大学院生の博士論文
- (2) クラントンによる成人教育者の能力開発にかかわって、つぎの点を現地で調査する。
 - ① カナダのニューブランズウィック・コミュニティ・カレッジのインストラクター能力開発プログラム (以下、IDP)。この実践は、クラントンが長年にわたり講師として担当してきたもので、能力開発についての考え方をづくりあげた実践のひとつとして、重要である。
 - ② クラントンがみずからの実践を通して能力開発についての考え方を創っていく際に、影響を与えた成人教育研究者にインタビューをおこなう。
- (3) 実践とその省察を核とした、社会教育・生涯学習支援者の力量形成の実態について、つぎの二種類を中心に調査する。
 - ① 社会教育実践研究フォーラムによる取り組みを、冊子『社会教育実践研究フォーラム』より跡づける。
 - ② 実践研究東京ラウンドテーブルなど、実践とその省察による力量形成の場に参加し、参加者の実態などを把握する。

4. 研究成果

- (1) クラントンによる成人教育者の能力開発の考え方

①実践とその省察を支える理論

クラントンは、自分が成人教育者として経験した実践の理論を展開するプロセスに、成人教育者が自律的・自立的に取り組んでいけるよう、メジローを中心にそのほかの成人教育者の理論と自身の経験を比較検討し、意識変容の学習としての能力開発の構造を示している。ただし、メジローの理論を単純に当てはめたのではなく、クラントンの成人教育実践と思索を経てのものであることが、より明確になった。

ロングスパンでかかわってきた、IDPでの実践のふり返りの記録を考察した結果、クラントンがどのような場面で誰を対象に実践をおこなっているかという文脈が明らかになった。同時に、そうした文脈の中で展開されてきた、クラントンの実践の理論を読み取ることができた。この実践についてはまた、実践をふり返る機会が提供され、実践の理論をつくることに結びつく取り組みもなされていることがわかった。

②実践とその省察による能力開発の方策

クラントンは、実践の省察にかかわる方策として、ブルックフィールドが示した批判的なふり返りの方策をいくつか紹介している。

他方で、つぎのものを提起している。まず、ワークショップで経験するアクティビティ的なものというよりも、職場で仲間と日常的に取り組める方策がある。たとえば、実践についての記録を書き職場で検討するといったものである。それから、事例から批判的なふり返りの方策について考えてみるよう提起している。すなわち、ある状況でどのような方策を取っていくことが妥当かを考えることである。最後に、実践をやる中で見出した方策を提起している。具体的には、芸術活動を通しての批判的なふり返りである。

以上について、職場の仲間と日常的に取り組めることを重視する点、ハウツーというよりも実践の中から方策が編み出されていくことを示している点が、とりわけ示唆に富む。

③影響を受けた成人教育研究者

ステーブン・ブルックフィールドは、批判的なふり返りの理論が、クラントンに大きな影響を与えている。ブルックフィールドの能力開発論について調査した結果、三つの実践の哲学をもっていること、批判的なふり返りを民主主義社会の創造につながるものとしてとらえていることが明らかになった。

ロナルド・セルベロの専門職の能力開発論は、クラントンに直接影響は与えていない。ただし、実践についてのふり返りを通して専門的知識をもっともよく学べるという先駆的指摘をしたと、クラントンは述べる。セルベロの能力開発論を検討した結果、「実践の

中の理論」に限界があるため「解放のための理論と実践」を重視しており、社会秩序を批判する知識と理論に関心をもって、社会の周縁にいる人びとの関心と知識に意識を払う必要性を強調していることがわかった。

以上について、クラントンとの関連を確認しておきたいことが二点ある。ひとつは、ブルックフィールド、セルベロ共に社会変革、社会批判の理論を基礎にしているが、クラントンは全面にかかげてはいない。ただし、これらの方向性をもって能力開発に取り組んでいることを確認しておきたい。もうひとつは、セルベロの主張を意識した上で、本研究は実践とその省察による、成人教育者の能力開発を追究する立場に立つことである。

④クラントンによる能力開発の意義と課題

まず意義は、つぎの二点にまとめられる。

- ・他者と自身の能力開発の実践を基底とする。それは、意識変容の学習理論が、実践に先立ってある理論先行型の能力開発ではなく、意識変容の学習理論を道具的に活用していく能力開発でもない。つまり、意識変容の学習理論に他者を当てはめていき変容させましょう、意識変容の学習理論を自分に当てはめていき変容しましょう、という事柄ではない。
- ・実践に関する見方の問い直し、相互作用の・相補的なものとして位置づいている。つまり、相手との関係の中で、補い合っておこなわれると考えられている。

これらは、とりわけ社会教育・生涯学習支援者の力量形成を担う・担いうる大学教員（研究者）にとって、重要な意義と考える。

課題は、実践とその省察に関する研究は、終わりが無いことに関するものである。クラントン自身もそうした視点に立っているが、大学や大学院等の授業、研修で学んだ後は自分たちで展開していくというスタンスである。それも一つの考え方はある。だが、授業や研修が終わった後でも、実践について語り聴き合う場のようなものを設け、現場での実践とその省察を支えるしくみを考えることも必要であると思われる。

(2) ペンシルベニア州立大学ハリスバーグ校の成人教育D.Edプログラム

クラントンが主査を務めた大学院生の博士論文の検討から、つぎのことがわかった。

- ①現場での実践とその省察として展開されており、大学院生が現場で取り組む実践を発展させることにつながるものとしておこなわれていた。

②現場での実践に参加した成人学習者が、自分たちの学習を省察した記録を、跡づけたり分析したりすることはされていた。他方で、実践者(成人教育者)としての自己(大学院生)のあり方についての省察は弱い。自分の実践についての記録をつけた大学院生もいたが、そうであった。しかしながら、この点は、ペンシルベニア州立大学ハリスバーグ校の成人教育 D.Ed プログラムが、博士論文として認める内容との関連で、理解する必要がある。博士論文には表現できなかったものの、研究を進めていく中で自己のあり方についても省察がされていた、自然と省察が生じたことが考えられる。

(3) 実践とその省察を核とした、社会教育・生涯学習支援者の力量形成の実態

クラントンから得られた知見を参考にしながら、社会教育・生涯学習支援者の力量形成を構想していくには、つぎの実態を考慮することが求められる。

①社会教育及びその隣接領域の職員以外の、社会教育・生涯学習支援者

社会教育実践分析研究フォーラム(以下、フォーラム)による取り組みでは、社会教育及びその隣接領域の職員の力量形成が実践的に模索されていた。やがて、実践の語り手として、講座などでの学習支援者や、ボランティアが登場するようになる。

また、フォーラムの一部メンバーが試行した、実践とその省察の機会(静岡大学公開講座など)より、地域で自分たちの学習を組織する人が、実践とその省察を必要としている実態が見えてきた。これらの人びとは、忙しい場合が多く、実践をふり返って先を展望したり実践を見直したりする機会は、なかなかない。あるいは、実践を語る機会はあっても、先進事例としての報告である。

以上の人びとも視野に含めた、社会教育・生涯学習支援者の、実践とその省察による力量形成を展望することが必要とされている。

②非正規、指定管理者の形態で働く職員

フォーラムによる取り組みや、フォーラムの一部メンバーが試行した取り組みには、社会教育及びその隣接領域で、非正規や指定管理者の形態で働く人が参加する。概して、正規職員の参加者数よりも多い。

こうした人びとが取り組む実践とその省察に際しては、主体的な相互学習の支援、学習のコーディネート、実践についての認識の確認等、実践に関する力量形成に加え、非正規や指定管理者という働き方の実態や困難さを確認して共有し、先を展望していける場の提供を視野に含めることが求められる。

③クラントンによる成人教育者の能力開発と社会教育・生涯学習支援者の関連

1999年にクラントン『おとなの学びを拓く』に依拠した報告が、社会教育実践分析研究フォーラムの取り組みの中でされた際、つぎの誤解が生じた可能性が見えてきた。

クラントンが言う成人教育者は、言葉だけ見ると「教える人」と理解できる。かつ、クラントン自身が共に取り組む成人教育者として、大学やカレッジの教員が一定層おり、クラントン自身も大学教員である。

これらは、主体的な相互学習を支援すること、共に取り組むことなどを専門性や役割とする、社会教育及びその隣接領域の職員とは異なっていると思われる。そのため、クラントンの考え方自体が、社会教育及びその隣接領域の職員には相容れないものとして受け止められたことが危惧される。もちろん、職員以外の社会教育・生涯学習の支援者に対しても、同様の危惧を考慮する必要がある。

確かに違いはあり、それを押さえることが必要である。他方で、主体的な相互学習を支援すること、共に取り組むことを重視している点では、つながる点がある。そうしたことをクラントンの事例に即して伝えていく必要性が、改めて確認できた。

(4) 成果報告書(冊子)の作成

現在または将来大学や大学院で社会教育・生涯学習の支援者の能力開発を担う大学教員に向け、本研究の成果報告書を作成した。

大学は社会教育主事基礎資格の付与等で、支援者養成に取り組んできている。しかし、日本社会教育学会社会教育・生涯学習関連職員問題特別委員会『知識基盤社会における社会教育の役割』(2008)にあるように、「実践と省察のサイクルを組み込んだ生涯にわたる力量形成」を担っていくことは、「海外の動向を含めた研究開発」が望まれているからである。作成した成果報告書は、この点に呼応するものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

① 渋江かさね(2011)、スティーブン・ブルックフィールドの成人教育実践に関する一考察、静岡大学教育学部研究報告(人文・社会科学篇)第61号、141-154頁(査読有)。

② 渋江かさね(2010)、ロナルド・セルベロによるプロフェッショナルの継続教育に関する一考察、静岡大学教育学部研究報告(人文・社会科学篇)第60号、173-184頁(査読有)。

〔学会発表〕（計2件）

- ① 渋江かさね、ニューブランズウィックコミュニティカレッジの講師を対象とした能力開発プログラム——成人教育を成人学習者として学ぶ——、日本社会教育学会第57回研究大会自由研究発表、2010年9月19日、神戸大学。
- ② 渋江かさね、ブルックフィールドの成人教育実践に関する一考察——成人・継続教育ドクタープログラムを中心に——、日本社会教育学会第56回研究大会自由研究発表、2009年9月19日、大東文化大学。

〔図書〕（計1件）

- ① 渋江かさね、北アメリカ成人教育者の能力開発に関する基礎的研究（平成20年—22年度科学研究費（若手研究B）研究成果報告書）、2011年3月、全147頁（査読無）。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

渋江 かさね (SHIBUE KASANE)
静岡大学・教育学研究科(研究院)・准教授
研究者番号：10377707

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし